

予科練碑は若くして国難に散った予科練英霊の慰霊碑であります、同時に私達生存者も含めた全員の墓標でもあります。

乙飛二十一期 大沼 良雄

慰霊碑の除幕式から一年有半過ぎ去った今日、戦後の二十三年を振り返って見ると、世相の変転の激しさに考えさせられることが多々あります。

敗戦後さんざんに批判された日々、次にはその戦記をテレビや映画で再現している現在を見るとき、戦争の批判は五年や十年では無く、五十年か百年たってから冷静にすべきだと思えます。祖国の危急に銃を取って立ち上らなかつた若人が、有史以来地球上のどの国にあつたでしょうか。予科練、すなわち海軍少年航空兵は、志願兵であつたこと、我々の代名詞のような「同期の桜」の歌と共に知って欲しいと思えます。

そして、それが決して好戦的の故ではなかつたことは、戦後あらゆる職業の分野で、社会の中堅として平和を愛し世のために貢献していることを見ても明らかであります。

予科練の魂は、若くして国難に散った予科練英霊の慰霊碑であります、同時に私達生存者も含めた全員の墓標でもあります。

現在の私達生存者も、五、六十年もすれば、全員この世を去ってしまうことになります。その時、予科練のことを語ってくれるものは誰か。それはその資料を保存してくれている記念館の外にありません。

慰霊碑の像― 搭乗員と練習生二人の肩を組み合つた像は大成功でした。現在の若い人、将来の若い人には、一々話をするよりも、その姿をみてもらうのが一番だと思えます。

若年であり素朴であるが故にめんめんとした遺書も残さず、「教官、教員、先輩に教わつた通りやります。」と言葉少なく死生有命のままに、飛行機乗りらしく戦つて散つた英霊達の数少ない遺品を大切に保管する記念館こそ、慰霊碑と共に私達が後世に残さなければならぬ記録の殿堂であると信じます。

慰霊碑はかくも立派に建立されました。記録の殿堂の建立もまた、全国会員の、よりよい知恵を出し合つて碑にふさわしい記念館を完成し、その開館式には、又あの懐かしい土浦で諸兄に再開できる日を楽しみに頑張りたいと思えます。

(この一文は、昭和四十二年十二月発行の、機関紙「予科練」の第二号に掲載された記事です。)